

「現地を訪問して想うこと」

2003年 政策科学部卒 橋 麻里

「福島県」。それは10歳から関西で育った私にとっては、非常に印象の薄い県である。

私は親の仕事の関係で、茨城県で生まれ、東京に転勤する7歳まで同県で過ごした。幼稚園生の時に「ハワイアンセンター」(現スパリゾートハワイアンズ)に行き、とても楽しかったことを覚えている。しかし、今でも名称を聞くだけでワクワクしてしまう「ハワイアンセンター」が福島県にあったことは、恥ずかしながら震災後に知った。今回ツアーに参加させていただいた「会津若松」は、子供の頃に旅行にも訪れたことがある街だったが、それが「福島県」にあると認識したのも、これまたここ数年の話だ。「西田敏行」という俳優が結構好きだが、NHK大河ドラマの「西郷隆盛」の印象が強すぎたためか、勝手に「福岡県」出身だと勘違いしていた。

社会人になり、仕事の関係で20代の2年間を東京で過ごした。私は全国で商業施設の企画開発をする仕事をしているため、比較的様々な土地に行くことが多い。東京に転勤した当時は、栃木県と群馬県の違いが分からなかったが、何回か仕事で両県に行くことで区別がつくようになった。青森、仙台、岩手等、東北に行くこともあった。新幹線で東北に向かう際に、東京から問もなく「郡山」という場所を「通過」したことを覚えているが、残念ながら、2年間の東京生活で、福島県に関わったことはなかった。

「青森といえばねぶた祭りやりんご」「島根県といえば出雲大社」などなど、それぞれの都道府県に何かしらのイメージがあるが、「福島県」と聞いて、何のイメージも湧いてこない。それが私を含め、一般的な関西人の「福島県」の印象だと思う。いや、何のイメージも湧いて「こなかった」(過去形)が正しい認識だろう。原発事故以降、福島第一原発が世界的に有名になったことにより、「福島県」=「原発事故」のイメージがついてしまった。これまで印象がなかったがために、「原発事故」のイメージはまるでファーストインプレッションの如く強烈だ。そして、例えば「青森のりんごが風評被害にあってるんだって」と聞けば共感が持てるのだが、それが無い。福島県の農産物って何？どの作物が風評被害に遭ってるの??ピンとこない。つまりこれまでの福島県の印象がないために、どうしても原発事故の被害に対して共感を覚えにくい、距離を感じてしまうという哀しい現実がある。(ごめんなさい。)

「ピンチはチャンス」「チャンスはピンチ」。これは私が学生時代にお世話になった石見先生の口癖だった。今回の震災と原発事故は地味な福島県を一躍有名にしてしまったが、これは福島県が大きく変わる転機ではないだろうか。「福島県」といえば何なのか?今がまさに、福島県のアイデンティティについてしっかり考え、情報発信する時期なのではないだろうか。

我々商業施設開発従事者の中で、ここ数年注目されている都市がある。それは「米国オレゴン州・ポートランド」だ。ポートランドは1970年代の石油ショックをきっかけに「環境共生社会」へと歩みだし、現在では全米ナンバーワンの環境に優しい街、暮らしたい街に選ばれ、サステイナブルな都市成長を続けている街だ。そこでは環境保全と経済発展が相乗効果を生み、現在では「グリーンソサエティー」「ローカルプロデュース」「エシカル」「ソーシャルキャピタル」など、時代をリードするライフスタイルが息づき、10年間で17%の人口が増加するなど、若い世代を中心に全米中の人々を惹き付けてやまない環境共生都市だ。

ポートランドには福島県の進むべき道のヒントになる取り組みが沢山ある。「日本のポートランドを作る！」「日本の次代を切り開くのは福島だ！」「福島から日本社会を変える！」をスローガンに、福島から「エネルギー消費型社会から持続可能な環境共生社会へ」舵を切ろうではありませんか。

今回会津若松のツアーに参加させていただいて、歴史しかり、気候しかり、福島県は地域性が非常に強いことを知った。それらの地域性を押さえつけるのではなく、地域性を活かしながら、緩やかに連携し、県全体が環境共生社会にシフトしていくことを心から願い、レポートを終了させていただきます。ツアーに参加させていただき本当にありがとうございました。